

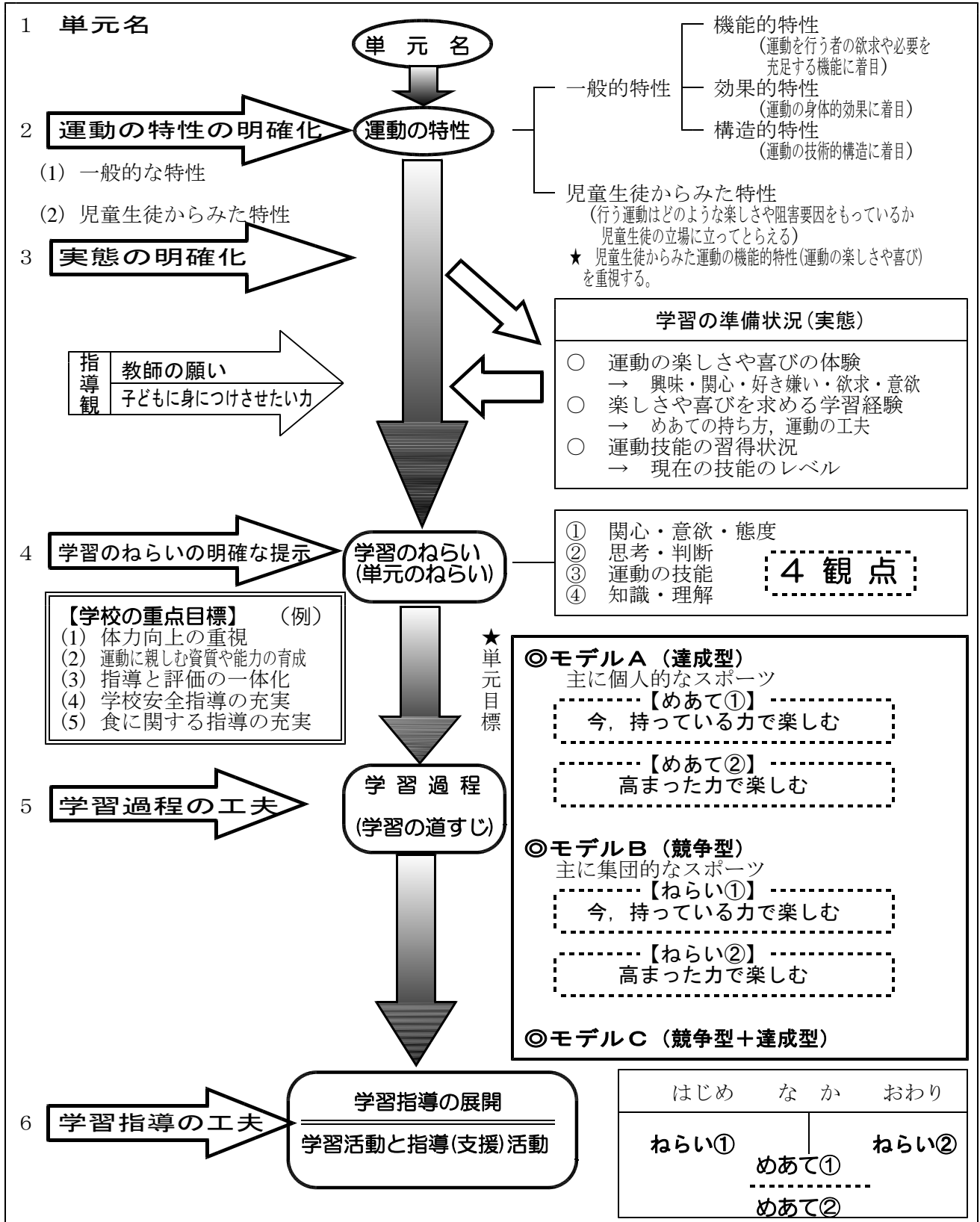
体育科指導資料(体育科指導の充実に向けて)

始良・伊佐教育事務所

1 単元計画の作成手順

単元計画は、年間指導計画に配列された一つ一つの単元(学習内容)を、授業としてどのように展開していくか見通しを立てたものであり、この中には「運動の特性」「児童生徒の実態」「単元のねらい」「学習過程(道すじ)」「学習のそれぞれの段階に応じた具体的な学習活動(具体的な働きかけ等)」を明確に示すことが大切である。児童生徒が自発的・自主的な学習ができる単元の指導計画を作成する必要がある。

以下は、運動の特性を重視した単元の指導計画(単元の学習過程)の作成手順である。



2 運動の特性の明確化

ア 一般的な特性

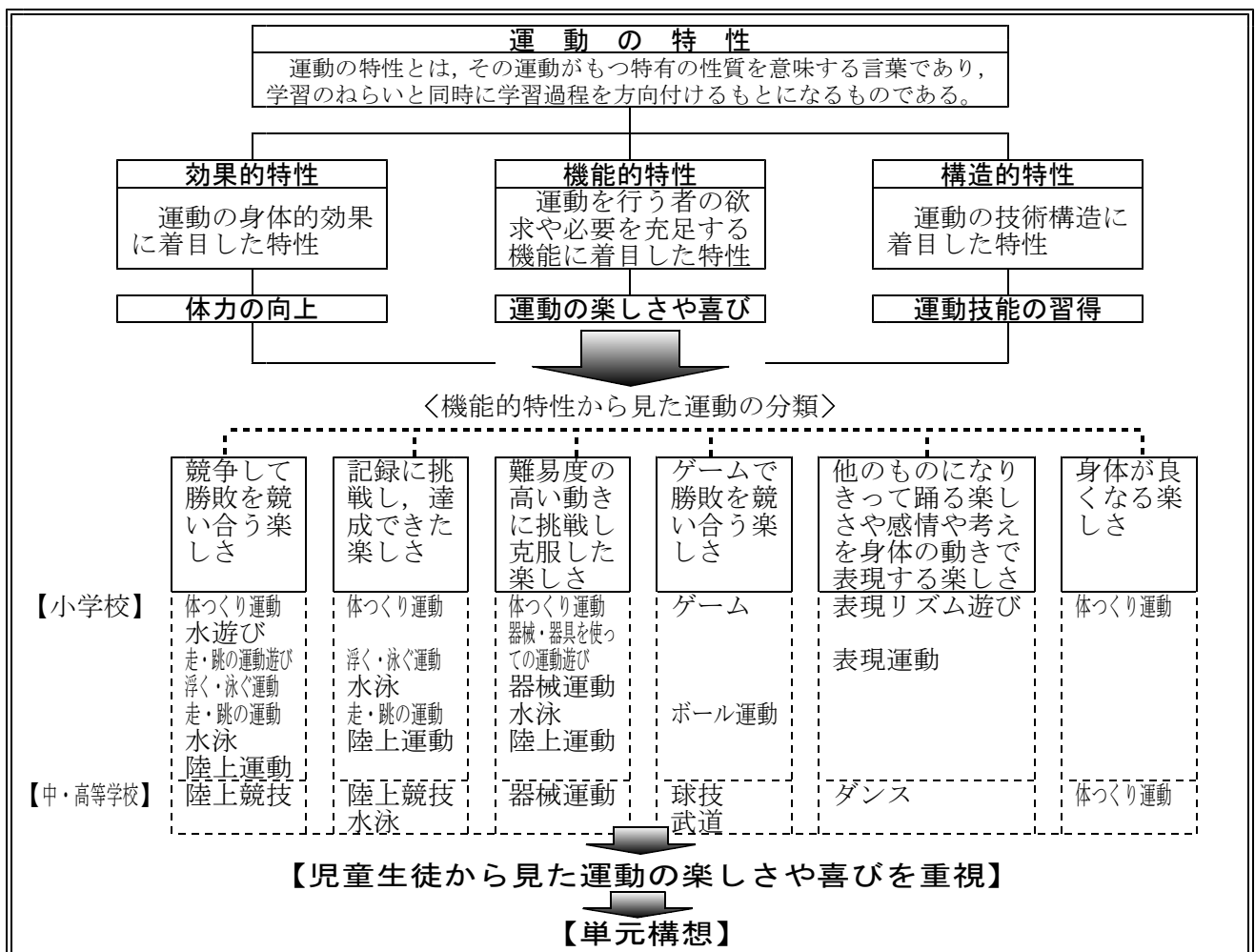
体育分野の学習は、**運動をめぐっての学習**であるところに最大の特徴がある。したがって、その内容である**運動の特性**をどのようにとらえるかによって、学習指導のねらいや方向性は異なってくる。

この運動の特性は、さまざまな視点から考えられるが、一般的には「**機能的特性**」「**効果的特性**」「**構造的特性**」の3つでとらえられており、体育では豊かなスポーツライフの基礎を培うという観点から、この3つの特性のうち「**機能的特性**」を重視して学習指導をすすめるようとしている。また、体育の学習では、全ての児童生徒に運動を行うことの表面的な楽しさだけでなく、各種の運動技能を高めて課題に挑戦したり、勝敗を競ったりすることから得られる**運動の本質的な楽しさや喜び**を味わわせることが重要である。そのためにも、それぞれの運動の「**機能的特性**」を味わうことを**体育学習の目的や内容**として位置付けさらにそれを深める方向で学習指導の展開を図ることが大切である。

イ 児童生徒から見た特性

学習する児童生徒はさまざまであり、運動の特性に対する求め方や触れ方は一様ではない。したがって、全ての児童生徒が運動の楽しさや喜びを味わうためには、どのような児童生徒も積極的に取り組めるような運動の取り上げ方(手立て)を工夫することが必要になる。

そのためには、運動を行う児童生徒自身がその運動の特性をどのように受け止め、どこに楽しさや喜びを感じ、そのためにはどのような学習が適切であるかなど、児童生徒と運動との関係から特性をとらえ直しておくことが大切である。この「**児童生徒から見た運動の特性**」を明らかにすることが、児童生徒の運動に対する**興味・関心の傾向や能力・適性等を明確にし、児童生徒の実態に応じた具体的な学習のねらいや指導の手立て、適切な学習集団の組織の仕方や学習活動の場を設定**することにつながるのである。



3 一人一人の特性(児童生徒の実態)のとらえ方

児童生徒の特性については、さまざまな角度からとらえることができるが、教科の学習指導では、目標との関連を重視し、学習指導に生きるようなとらえ方をすることが大切である。したがって、運動の楽しさや喜びを重視し、自発的・自主的な運動への取組を求めようとするには、一人一人が感じる特性を運動の楽しさや喜びを求める学習と指導に生かすという視点でとらえることになる。

【実態把握の観点例】

この考え方に基づく一人一人の特性の具体的なとらえ方については、まず「今ある児童生徒の期待や要求を理解し」、それらを吸収するために「現在の力量から児童生徒がどのような運動の楽しみ方ができるかを把握し」、それによって教師の指導観を得るという構造でとらえることができる。

そして、教師の指導観において、どのような「ねらい」を持たせれば楽しく学習することができるか、どんな難易度のある条件設定であればどの児童生徒も意欲的に挑戦することができるか、どんなルールにすれば一人一人が楽しくゲームをすることができるかなどの、学習の「ねらい」や内容を具現化することが大切である。

【実態把握の観点例】

A 運動の楽しさや喜びの体験の差

① 運動に対する興味・関心の状況

- 運動すること自体の志向性(好き嫌い)
- 仲間と活動すること自体の志向性
- 運動の特性への志向性

② 運動に対する欲求・意欲の状況

- その運動に対しての意欲
- その運動に対する注目、注意
- その運動に対しての期待、求めるもの

B 運動の楽しさや喜びを求める学習経験の差

① 自分の力にあつためあてを正しくもてるかどうか、その状況

- 先生の指導があればできる。
- 仲間の協力があればできる。
- 学習資料等があればできる。
- 学習資料等を活用し、発展させてできる。

② めあてを達成するための運動の工夫や練習ができるかどうかの状況

- 具体的には①に同様

③ 協力や教え合いがオープンにできるかどうかの状況

- 具体的には①に同様

C 技能の習得状況や技能のレベル

① 現在身に付けている技能や知識の状況

② 技術構造から見て、特性への触れ方はどのようにできるかの状況(球技の例)

- やさしいルールとやさしい運動の場の条件であれば、ゲームを楽しむことができる。
- 攻防に作戦を駆使して、ゲームを楽しむことができる。
- 技能を伸ばすことによって、ゲームを楽しむことができる。

4 単元計画の内容

授業を充実させるためには、単元計画の充実が不可欠である。これにより、体育学習(指導)における基本構想・基本計画を共有することができ、教師側と学ぶ側の目指す方向を一致させることが可能となる。

この学習指導の構想を一定の形式に表現したものが学習指導案である。学習指導案は、教師の意図や構想が最も適切に表現されることが望ましく、一人一人の教師の創意工夫が期待される。

そこで、学習指導案作成における一般的な項目は次のとおりである。

- 1 単元名(領域名)
- 2 単元について
 - (1) 運動の特性(一般的な特性, 児童生徒からみた特性)
 - (2) 児童生徒の実態(学級観)
 - (3) 教師の指導観
- 3 学習のねらいと道すじ
 - (1) 学習のねらい(単元目標)
 - (2) 学習の道すじ(学習過程)
- 4 時間配分
- 5 評価規準と評価構想(方法)
- 6 単元の指導計画(授業の展開と評価計画)
- 7 本時の指導
 - (1) 目標
 - (2) 展開

5 「ねらい」と「めあて」

『ねらい』とは、運動の楽しさや喜びを求めて学習をどのように進めるのか、単元全体の学習活動を方向付ける「目標概念」の言葉である。

『めあて』とは、運動の楽しさや喜び(特性)に触れるために、今自分の力でできることはどんなことか、少し努力すればできそうな新しいことへの挑戦としてどんなことを取り上げるかなど、活動の内容を示す「活動目標」の言葉である。

一方、『ねらい①』や『めあて①』という使い方がある。数字をつける場合は、運動の特性に触れるために、どんな段階を歩んで行えばよいか、「学習の段階」つまり「学習過程」を意味する言葉である。「できること」から学習をはじめ、「難しいことや新しいこと」に挑戦する学習過程は、「できること」で運動の楽しさや喜びを十分に体験し、それを土台にして創意・工夫を加えて学習を発展させるという道すじであり、前者を①の段階、後者を②の段階として示している。

また、学習過程の構成の仕方としては、単元の前半・後半に分けて①・②を構成する「ステージ型」の場合と、1単位時間ごとに①・②を構成する「スパイラル型」の場合がある。これらは、運動の特性との関わりによって異なってくる。前者は、『ねらい①』－『ねらい②』と表され、主に集団的なスポーツに適用される場合が多い。後者は、『めあて①』－『めあて②』と表され、主に個人的なスポーツに適用される場合が多い。

しかし、集団的スポーツにおいても、チームとしての学習の方向性が「ねらい」として定まり、その「ねらい」を達成するために個人の「めあて」をもって学習を進めていくことはいうまでもない。これらは、いずれも指導を進める上での「約束事」であり、他に適切な言葉の使い方があれば、使用しても差し支えないものである。